

# 三重・愛知・岐阜県境地域の言語使用と 言語意識

吉田 健二 東 葉奈 伊藤 菜緒 伊藤 萌香 尾迫 愛理 加藤 千尋  
木村 后花 久野 由実 古池 舞帆 後藤 温賀 榊原 希美香  
柴田 晴菜 下瀬 桃子 杉浦 玄佳 田中 優奈 田邊 梨紗子 辻 咲希  
所 恋実 橋本 晋太郎 林 実咲 光島 千尋 森口 綾奈 吉田 聖菜

## 1. はじめに

愛知淑徳大学国文学科「国語学演習」では、毎年、近隣地域における言語調査を実施している。本稿では筆者たちが2016年9月に実施した調査の結果を中心に、これまでの知見を整理する。今回は、前回の調査（吉田・他 2016）で興味深い結果が得られた項目について隣接地域で追加調査をおこなうとともに、言語意識や音声による方言推定などの調査をこころみた。以下では調査概要をのべ（2節）、言語現象ごとに調査結果の報告と考察をのべ（3～7節）、最後に全体を総括する（8節）。

## 2. 調査概要

過去2年で未調査の市町から、三重・愛知・岐阜の県境にちかい7市町の27名のかたがたに面接調査を実施し、ことばの使用状況などを教えていただいた（表1）。愛知では、昨年の弥富・蟹江の北に位置し、今回調査した岐阜県海津市と木曾川をはさんで接する、愛西市の旧立田村、旧八開村、三重では、海津市と養老山系をはさんで接するいなべ市と、四日市市のうち前回までに調査した朝日町・川越町のすぐ南の、富田と羽津の二地区を調査した。これにより、これまでの調査でカバーしたのは17地区、話者が55名となった（図1）。調査

は 20, 30, 40 歳代および、50 歳以上の 4 層に実施した。以下では、各話者を地域名と年齢層をくみあわせた略号でよぶ。今回は全員が市町機関の職員だったが、今回は 27 名中 7 名がこれ以外の方だった。男性 14 名・女性 13 名、平均年齢 44.9 歳と 36.5 歳で、女性の話者がやや若い (Welch's  $t(24) = 1.78$ ;  $p=0.09$ )。言語形成期を 5～15 歳とすると、**hatikai30** だけが、調査地以外でも数年をすごしている。愛西市に接する愛知県津島市が主なので、おおきなちがいはないと予想されるが、留意する必要がある。

表 1 話者一覧 (年齢は 2016 年 9 月 21 日時点)

略号	地域	年齢	性	旧地区	他地での居住歴など
hazu20	羽津	26	女		なし
hazu30	羽津	32	女		なし
hazu40	羽津	45	女		5 歳まで岐阜
hazu60	羽津	61	男		4 歳まで名古屋
tomida20	富田	21	男		大学・名古屋に通学中
tomida30	富田	35	女		なし
tomida40	富田	48	女		なし
tomida50	富田	52	女		なし
inabe20	いなべ	28	女	大安町	大学・滋賀
inabe30	いなべ	35	男	北勢町	大学・三重県川越町
inabe40	いなべ	41	男	藤原町	なし
inabe60	いなべ	61	男	北勢町	なし
tatuta20	立田	29	女		大学・東京世田谷
tatuta30	立田	35	男		大学・愛媛県松山
tatuta40	立田	44	男		22-30 愛知県岡崎 / 37-40 ソウル
tatuta50	立田	56	男		なし
hatikai20	八開	29	女		なし
hatikai30	八開	38	女		8 歳まで愛知県津島 / 兵庫、大学・豊橋
hatikai50	八開	59	男		5 歳まで名古屋市中村
kaizu20	海津	23	女	南濃町	大学・滋賀
kaizu30	海津	37	男	海津町	なし

kaizu40	海津	45	男	平田町	大学・愛知に通学
kaizu50	海津	56	女	海津町	大学・豊橋
wanouti20	輪之内	23	男		大学・広島
wanouti30	輪之内	33	女		なし
wanouti40	輪之内	47	男		大学・坂祝
wanouti60	輪之内	64	男		就職後、中津川と土岐（計8年）

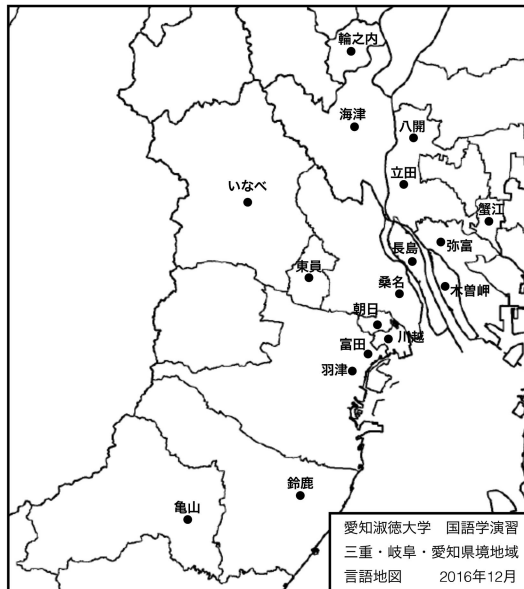


図1 調査を実施した市町（2014～2016年）。  
白地図は technocco.jp 提供

臨地調査により、話者お一人ずつと対面調査をおこなった。準備した調査票にもとづいて質問をする項目のほかに、アクセント・イントネーション研究のための発話音声の録音、方言認定と評価のための音声聴取実験などをまじえ、調査全体でお一人一時間以内だった。

### 3. ことばの意識

言語現象項目の考察の参考にするため、ことばにかんする意識の調査をくわえた。地域差などの傾向がみいだされたので概略をのべる。調査した項目は以下のとおり。くわしくは調査票を参照（希望者にはさしあげます：連絡先 kenjiyo.work@gmail.com）。

- (1) 自身のことばの構成比（合計100. 例：愛知60, 岐阜30, 標準語100）
- (2) 自分の地域の方言が好きか（1－10）
- (3) 自分の地域の方言の標準語との近さ（1－10）
- (4) おなじ地域の友人に方言をつかうか（1－10）
- (5) ちがう地域出身の友人に方言をつかうか（1－10）

(1)の結果のうち、地元県の方言の割合のみを図2にしめす。それぞれ4人の話者の平均値（八開のみ3人）。三重の富田、いなべの話者が「自分のことばはほとんど自分の県のことば」とこたえる傾向がたかい。いっぽう、岐阜の海津、輪之内は地元のことばをつかっているという意識がひくい。愛知・三重にはさまれた地理上の位置（の意識）による可能性がかんがえられる。

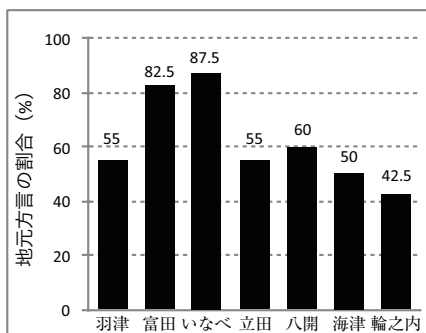


図2 自身のことばの方言構成比  
（地元の方言の割合）

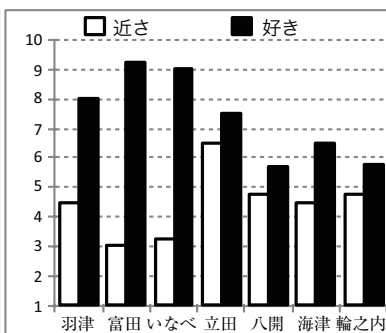


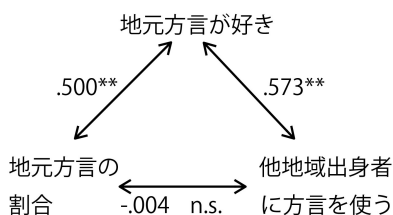
図3 地元方言と共通語の近さ  
/ 好きかどうか

つぎに、(2)と(3)について、地区ごとの平均値を図3にしめす。ここでも三重の話者に、「じぶんの地域のことばは標準語からとおい」と意識する傾向がみ

とめられる。これに反比例するように、「地元のことばが好き」とこたえる傾向も、三重の話者にたかい。ただし、個人を単位とした単回帰分析の結果は両者の関連を支持しない ( $t(25) = -1.150; p=.26$ )。

(4)(5)は話し相手がおなじ地域出身であるかどうかによる地元方言の使用・不使用であり、両者の差は「方言～共通語間切り替えををする程度」とみなすことができる。(1)～(3)の言語意識と、(5)と(4)の差との関連を、単回帰分析によって検討したところ、5%水準で有意な相関がみられたものはなかったが、(2)については、関連する傾向がみられた ( $t(25) = -2.05, p=.051$ )。相関係数 (Pearson) は  $-0.477$  と負の値なので、「地元の方言がすきなほど、おなじ地域出身であるかどうかによって方言をつかう程度をかえない」という傾向になる。

いっぽう、(1)(2)と(5)とのあいだに有意な関連がみられた。パス解析などの手法を適用するにはケース数が少なすぎるので、(1)(2)(5)の3変数について、2つの変数どうしの、のこる1つの変数の影響を統制した偏相関係数をもとめ、有意性の検定をおこなった (統計言語 R の `pcor` および `pcor.test` 関数 ( `gmm` ライブラリ) を利用)。結果、(2)と(5)、(1)と(2)のあいだに有意な (正の) 偏相関がみられた。下図のようにまとめられる (偏相関係数にそえた \*\* は  $p<.01$  をしめす)。(1)と(5)のあいだにも有意な相関があるが、(2)の影響を影響をのぞいた偏相関は 0 にちかく、(2)を介したみかけの相関である。



ここから、(5)「他の地域出身の友人にも方言をつかう」意識の程度をきめる要因としては、(2)の「地元方言が好き」なことがつよい効果をおよぼすことがうかがえる。(2)はさらに、(1)の「自分のことばには地元方言の割合が高い」という意識にもつなが

ると推測される。Labov (1962) などで指摘されてきた、地元や元のことばへの愛着が言語意識や言語行動に反映される、という観察につづるものだとかんがえられる。意識項目全体としては、今回の話者では三重の話者に、愛知・岐阜とくらべて、(3)じぶんたちのことばは標準語とはことなる固有性がたかい

という意識がたかく、(2)地元のことばへの愛着がつよい傾向があり、そのため、(1)じぶんたちのことばはその地元のことばで構成される割合がたかいかんがえ、また、(5)他地域出身の友人にたいしても、比較的地元固有のことばをかえずにもちいているという意識をもつ傾向がつよい、ということがうかがわれた。田中・前田(2012)では、東海地域を(方言と共通語の)「消極的使い分け派」とし、近畿を「積極的方言話者」としている。これにてらすと、今回調査した三重北部地域は(東海よりは)近畿的な方言(使用)意識をもっていることを示唆する。

## 4. アクセント項目

### 4.1. 複合名詞のアクセント(吉田・橋本)

今回も複合名詞のアクセントをしらべた。岐阜在住の著者(辻・橋本)が、大学などでの日常会話で周囲とのアクセントの相違にきづいたものを中心とした。運動能力テストで実施する「反復横飛び」は(共通語の)複合語アクセントの支配的傾向にしたがえば、後部要素ヨコトビの1拍目にアクセント核がおかれるが、岐阜では、前部要素ハンブクの前拍目のあとからアクセント核によるピッチ下降があり、後部要素ヨコトビでふたたび語頭にみられる上昇があり、その後の下降のない音調型がきかれる(図4)。ピッチの高い部分がひとつにならない、したがって韻律的には複合していない「二語連続」(中井 2012:148)の音調である(ただし「反復」は岐阜でも[0]型なので、複合によりことなる音調型にかわっている)。おもに学校の活動で使用・習得される語彙であり、この音調型は個別・特殊なもので、東海地域に固有の特徴の反映ではない可能性もある。そこで(6)の項目のアクセントを調査した。

#### (6) 複合語アクセント調査項目

反復横飛び [-1]、頭文字 [-1]、伊勢神宮 [-3 or -1]、新横浜 [-1]、作文 [0]、作文集 [3-]、作文コンクール [-3]、人権作文 [-1]、英作文 [-1]、あいうえお作文 [-1]

[ ] 内は、共通語に支配的な傾向から予測されるアクセント型(中井 2012、

秋永 2014、NHK 放送文化研究所 2016 による。記載のない語は、それらに記述された支配的傾向にもとづいて推測した)。前部・後部要素にわけ、前部要素が無核で(かつ後部要素初頭にかけてのピッチ下降・上昇もなく)韻律的に後部要素と一体化していることをハイフン [-] でしめす。たとえば [-1] は、前部要素が無核で、後部要素1拍目にアクセント核があることをあらわす。[3-] のようにハイフンがあとにあるものは、前部要素のアクセント核による下降(あるいはピッチのひくさ)が後部要素でも継続するケースで、やはり韻律的に前部・後部要素が一体化していることをしめす。

「作文」は岐阜などで [2] 型がきかれる。これが複合語アクセントにどのように影響をおよぼすかを検討するため、この語を前部・後部要素にもつ複合語のアクセントを調査した。「作文」が前部にくるものについては、後部要素がみじかく、前部要素内にアクセント核がくることが予想される「作文集」と、後部要素がながく、後部要素のアクセント核の位置が維持されることが予想される「作文コンクール」をしらべた。表2のとおり、これらについては共通語アクセントとの相違はなく、東海地域も共通語とおなじ傾向が支配的であることが確認された。「頭文字」「伊勢神宮」もこれに準ずるが、中井(2002)で京都では稀であると報告されている「頭文字」の [3-] 型、「伊勢神宮」の [-3] 型が三重におおい傾向(「頭文字」[3-] は岐阜・愛知でも)がめだつ。「作文」が後部にくるものは、なじみがたかいたおもわれる「英作文」以外に、使用・認知度がひくい、ないとかんがえられる「人権作文」、臨時の複合アクセントが期待される造語「あいうえお作文」をしらべ、支配的な傾向をさぐる。**hazu30** をのぞく 26 名から発話データを得た。橋本と吉田が独立にアクセント型の聴覚記述をおこない、吉田が両者を照合して最終的なアクセント型を確定した。結果を表2にしめす。「作文」をのぞき、各語のアクセントを2列にしめす。

表2 複合語アクセント 調査語は省略形. 本文(6)を参照.  
アクセント表示法も本文を参照. tomida40の最初3語は  
録音ミスによる欠損.

No	name	反復	頭文	伊勢	新横	作文	用紙	集	コンク	人権	英作	あいう
1	hazu20	- 1	3 - - 3 - 2	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
2	hazu40	- 1	3 - - 1 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
3	hazu60	- 2	3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
4	tomida20	- 1	1 - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
5	tomida30	- 1	3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
6	tomida40				- 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
7	tomida50	- 1	- 1 - 1 - 1 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
8	inabe20	- 1	3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
9	inabe30	- 1	3 - - 1 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
10	inabe40	- 1	3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
11	inabe60	- 0	- 1 - 1 - 1 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
12	tatuta20	- 1	3 - - 3 - 2	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
13	tatuta30	- 1	3 - - 1 - 2	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
14	tatuta40	1 0	- 1 - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
15	tatuta50	1 0	- 1 - 1 0 2	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
16	hatikai20	1 0	3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
17	hatikai30		1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
18	hatikai50	1 0	- 1 - 1 0 2	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
19	kaizu20	1 0	3 - - 1 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1
20	kaizu30	1 0	3 - - 1 - 2	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1
21	kaizu40	1 0	- 1 - 1 - 2	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1
22	kaizu50	- 1	3 - - 1 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
23	wanouti20	1 0	- 1 - 1 - 2	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1	0 - 1 3 - - 3 - 1
24	wanouti30	- 0	3 - - 1 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1
25	wanouti40	1 0	- 1 - 1 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1
26	wanouti60	1 0	- 1 - 1 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1	2 - 1 3 - - 3 - 1

hazu20の「反復」の[-1]のように、前部あるいは後部のアクセントが保持されていないケースはハイフン[-]を記入する。いっぽう、前部・後部要素が独立な音調をしめたものは、両列に数字がはいる。tatuta40などの[10]は本節冒頭でのべた「二語連続」の音調型である。kaizu30の「あいうえお作文」の[32]も二語連続の音調だが、なじみのない語を発音した結果、複合語とは理解せず、それぞれのアクセントを発音した可能性もある。



まず「反復横飛び」をみる。愛知・岐阜の10/15人から [1 0] の音調がきかれた。図4に二例をしめす。「反復」のアクセントの下降でピッチレンジが小さくなったため、「横飛び」の語頭の上昇はピッチトラック上ではめだたないが、ほぼ平坦なピッチ動態をしめし、聴覚上、語頭の上昇は明瞭である。二語連続になる理由としてかんがえられるのが、後部要素「横飛び」も複合語で、「反復 [横飛び]」という右枝分かれ構造になっていることである。「内閣総理大臣」など、この構造で二語連続アクセントになりやすい傾向が指摘されている（窪菌 1995）。しかし、この語はそのようなケースの例としてあげられているものよりみじかく、一般的な複合語アクセントの傾向にしたがい、共通語では [- 1] が優勢だともわれる。同様のみじかさで、右枝分かれ構造の「セアカゴケグモ」が、NHK ニュースで、[0 0] と後部要素初頭にもういちどピッチ上昇をおいた音調型で発音されるのを聞いたことがある。ゴケグモ初頭の濁音節「ゴ」が連濁によるものではないこと（「苔」でなく「後家」）を、複合がよわいことを反映した音調によりしめそうとする意図があったものとかんがえられる。

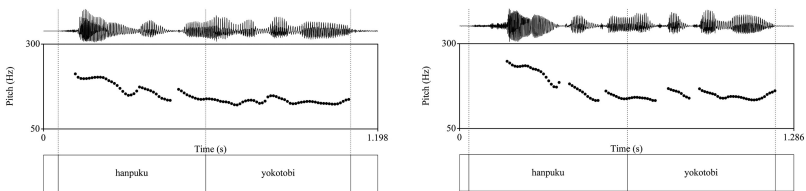


図4 「反復横飛び」のピッチ動態：左 tatuta50 右 wanouti60.  
上から音声波形、ピッチトラック、形態素境界（反復 | 横飛び）.  
横軸が時間（単位：秒）、縦軸が基本周波数（単位：Hz）

つぎに「作文」をみる。岐阜の6/8名が [2] 型で、あとは [0] 型だった。共通語アクセントで、後部要素が4拍以上、かつ中高型アクセントであるばあい、そのアクセント核が保持される「不完全複合」型があらわれる傾向が指摘されている（中井 2012:159）。岐阜の話者にこの傾向がみられ、「作文」を後部要素とする「人権作文」「英作文」「あいうえお作文」の後半部に [2] 型がみられた。ただし、ここでも「反復横飛び」と同様の、後部要素初頭のピッチ上昇が観察

される [0 2] 型がみられたことが注目される。図 5 に二例をしめす。後半要素初頭（形態素境界の直後）「サ」の母音区間のピッチは子音 [s] の影響でたかくはじまるが、その後下降し、「クブン」の区間でふたたび上昇、さらに「ク」からアクセント核によるピッチ下降をしめす。ピッチ動態上では微妙だが、聴覚的には弱い明瞭なピッチ下降・上昇がある。

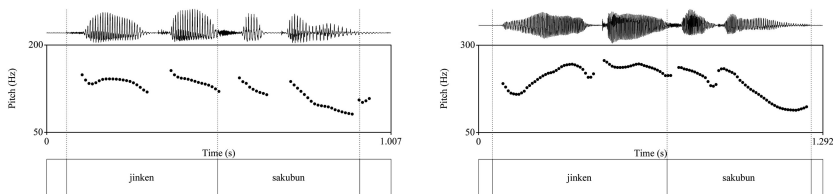


図 5 「人権作文」のピッチ動態：左 kaizu40 右 wanouti60.

さらに「英作文」とちかい語構成の「新横浜」でも、愛知の2名に [0 2] 型がみられた。「反復横飛び」にみられた前部・後部要素の韻律的独立性が、岐阜（および愛知）方言に一般的ななんらかの特徴を反映している可能性を示唆する。このことに関連する可能性があるのが、愛知・岐阜アクセントに特徴的な、語頭のピッチ上昇のおくれである（水谷 1960）。図 6 に二例をあげる。

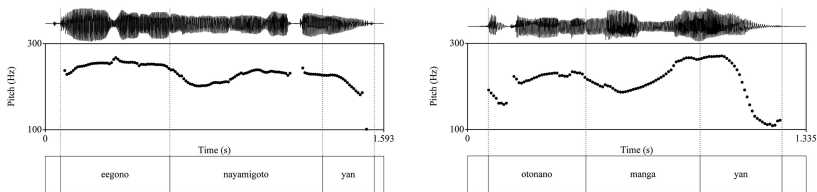


図 6 語頭上昇のおくれの例：左 hatikai20 「英語の悩みごとやん」、右 wanouti60 「大人の漫画やん」。2 語め（下線部）に上昇のおくれがみられる。

いずれも、語頭からのピッチ上昇が3拍目なかばに完了する。東京方言アクセントでは、「漫画」のように語頭から2拍目に特殊拍をふくむ長音節のばあい、

語頭のピッチのひくまりがよわまる傾向があることが指摘されているが (Pierrehumbert and Beckman 1988 の weak %L)、**wanouti60** の発話は、その条件でも明瞭なピッチのひくまりと、その後の上昇のおくれをしめす。この傾向と複合語のピッチ実現とに関連があるかどうかは今後検証する必要があるが、関連があるとすれば、「愛知・岐阜における語頭のピッチのひくまりのつよさ(頑健さ)が、複合語についても両要素の切れ目におけるピッチのひくまりとしてあらわれやすい」ということになるとおもわれる。この現象が個別的・語彙的なものにとどまらず、愛知・岐阜などに一般的な韻律構造上・音声実現上の傾向でもあるかどうか検証する必要がある。もし一般性がみとめられるとすれば、この方言において、「英作文」の [-2] 型のような「不完全複合」と [0 2] 型のように不完全複合でなおかつ後部要素初頭にピッチ上昇をおくもの、さらに「あいうえお作文」の [3 2] 型や、「反復横跳び」の [1 0] のような「二語連続」とのあいだに、「アクセント削除がある/ない」というような非連続の(カテゴリーカルな)ちがいが無い、あるいは弱いとみなすべき可能性がうかがいあがる。

語頭のピッチ上昇を、語よりおおきい韻律単位に属する、したがって語そのものの韻律情報ではないとみなすたちば(上野 1989 など)にたいして、郡(2004)は東京方言の文レベルの音声実現の観察から、上昇を「アクセント単位」(概略「語」に相当)の特徴だとする。環境によって弱化したり、実現しなかったりすることもあるが、この上昇はアクセント単位の特徴としてつねに存在する、というみかたである。岐阜・愛知の話者に見られた、「不完全複合～二語連続」の変異も、これと類似のものである可能性がかんがえられる。(愛知・岐阜などについては)形態・意味上の複合によって前部・後部要素が韻律単位として完全に一体化しているわけではなく、それぞれのアクセントの特徴、とくに語頭のピッチのひくまりとその上昇も、観察できないほど弱化することもあるが存在しており、語の長さや語構造、話者個人の傾向などにより、顕現することもあるという可能性である。対象とする語や語構造などをふやし、さらに検討したい。

#### 4.2. 2拍名詞のアクセント（伊藤菜・柴田・吉田）

過去2回とおなじく、大阪・三重などで音調型の対立の解消がすすんでいることがしられる、2拍名詞の類別語彙IV・V類の各6語（海・帯・苗・肌・船・罌 / 雨・猿・窓・春・鮎・蛇）のアクセントを調査した。27人中25名から1回発話のみの音声データを得た。これまでと同じく「A助詞「が」後接 / B助詞「が」なし / C強調」の3条件をしらべたが（詳細は吉田・他2015）、愛知・岐阜の話者はA、B条件ですべて頭高型で、調査内の会話からも東京式アクセントと判断されたので、C条件は省略した（wanouti30, wanouti40には実施、すべて頭高型）。いっぽう三重の話者は、程度差はあるものの、調査内の会話で全員が京阪式アクセントの特徴ももつ。前年度調査と同じく3～5拍語の調査もおこなったが、そこでも全員に京阪式の特徴がみられた。語ごとの詳細は省略し、京阪式でこの語群にみられるLL(H)型あるいはLH(L)型で発音した割合（図7左）、さらにそのうち、IV類がLL(H)、V類がLH(L)という旧来の京阪式の型で発音した割合を報告する（図7右）。右図の値は、東京式アクセントの地域については算出できないので、しめさない。2014, 2015年の結果と総合して、地理×世代分布をみる。

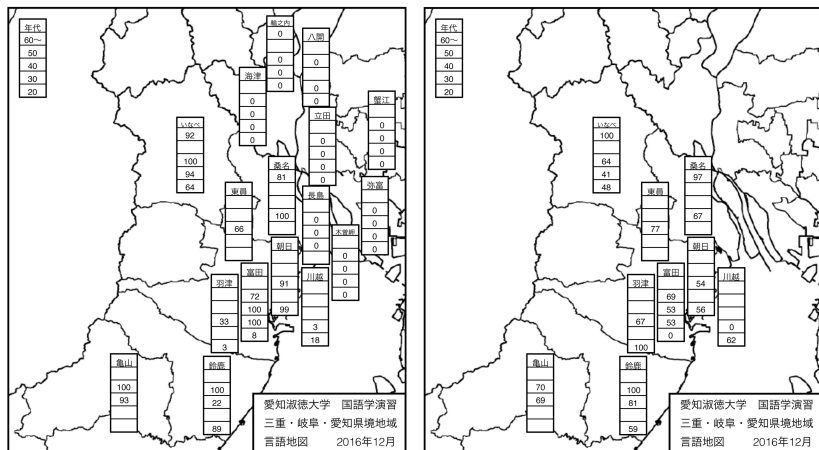


図7 2拍名詞IV・V類の京阪アクセント保持率 左：京阪式のLL(H), LH(L)の出現率 右：そのうち、伝統的音調型(IV類=LL(H), V類=LH(H))との合致率(%). 各地、話者の年代順。

吉田・他(2016)の時点の結果とおなじく、桑名市旧長島町以东ではすべて頭高型で、京阪式アクセントはまったくあらわれない。今回調査した、揖斐川西岸・旧南濃町の **kaizu20** もすべて頭高型。岐阜西南地域は、一部で垂井式アクセントの変種がみられるとされるが(上野 1987:19-23)、今回の調査の範囲ではその兆候はうかがえなかった。海津市、輪之内町は先行研究でも(内輪)東京式で、特殊アクセントがみられるのは旧南濃町最南端、桑名市にちかい松山地区のみとされる(生田 1951:273)。**kaizu20** はより北の駒野地域の方で、しかも若いため、先行研究の知見にてらしても東京式が予想される(ちなみに、著者のひとり伊藤も旧南濃町・駒野地域生育で、東京式アクセントである)。

逆にこの西側では、多少でも京阪式アクセントの特徴をしめさない話者はひとりもない。頭高型がまったくあらわれないのは、**kameyama50, suzuka50, tomida40, tomida30, inabe40, kuwana30** の6名のみで、東京式の進出はうたがないが、「京阪式の特徴がすこしでもみられるか否か」という点でみると、50年ほど前の報告(金田一 1973)から、アクセント現象の分布境界はうごいていないことになる。三重内部での地域差も明瞭ではなく、めだつのは世代差である。図7左で、京阪式の音調型の出現率がひくいのは、20・30歳代の若い世代だった。また、図7の左右を総合すると、調査語全体として京阪式の出現率がたかく、かつ伝統的な音調型でIV・V類の区別が概略たまたれているのは、**suzuka50, inabe60, kuwana60**(じっさいは90歳代)と年齢がたかいかたがたである。朝日町などの、50%前後の伝統的音調型への一致率(図7右)は、A条件ではLH(L)、B・C条件ではLL(H)と、すべての語をおなじ音調型で発音する傾向によるみかけの一致で、音調型の合流をあらわす。したがって、中年～高年の一部をのぞき、IV・V類の音調型の合流が急速にすすんでいることが確認された。また、吉田・他(2015:129)では、郡(2012)が大阪市方言で見出したように、A、B条件ではみとめられなかったIV・V類の対立がC条件で顕在化する傾向が三重の話者にも認められたことを報告したが、その傾向は全体としてはあまりつよいものではなかった。あえていえばむしろA条件で対立が顕現する傾向があり、B条件では郡の大阪方言の報告どおり、またC条件でも、対立が中和し、すべてLL(H)で実現する傾向があった。

## 5. 音声による方言推定と評価（吉田）

日本語に地域差があることは一般にも意識されており、方言イメージにかんする全国的・大規模な調査もある（『月刊言語』1995年11月別冊「変容する日本の方言」）。しかし、言語にたいする評価はその変異の話者や話されている地域などにたいする社会的評価に影響されることが知られており（Giles and Billings 2004）、言語現象の特徴そのものにたいする評価とはいえ、言語特徴の客観的な評価の基準もそもそも存在しない。また、方言研究者など特殊な層をのぞくと、方言の具体的な特徴について正確な知識をもつ人はすくないとおもわれる。したがって、ほとんど聞いたことがなく、どこの人間が話したのかわからない言語変異にたいする評価や、方言間のことなりについての認識は、アメリカ英語について知られているのと同様（Clopper and Pisoni 2007 など）、基準が不明瞭な、曖昧なものとなることが予想される。そこで、4年生大橋の卒業論文（大橋 2016）の実験企画にあわせ、今回の臨地調査でも、各話者に実験に参加していただいた。詳細は別途報告する予定だが（大橋 2016 も参照）、ここでも概略をのべる。

調査のフォーマットは岡本（2001）などになったもので、大橋の母方言である岐阜県大垣方言による発話（A=gifu）と、それを東京方言になおしたもの（B = standard：東京近郊の女子大学生 10 名に適切さのチェックをうけた）の 2 種類をともに大橋が発話し、発話者の声質の違いなどによる評価のちがいの影響を制御した（東京出身の女子大学生 1 名がお手本を録音、それをまねて発話し、吉田がアクセントなどのあやまりをチェックした）。いずれも 37 秒ほどの、女子大学生の自分語りである。本調査 27 名の話者を無作為に A、B のいずれかにわりあて（A=14 人、B=13 人）、両者を比較して評価することがないようにした。評価語は先行研究にならい、(7)の 12 対とした。音声聴取後すぐに評価語を両端においた 5 段階のスケールを記した回答用紙をもちいて、（人物等ではなく）「ことばづかいについて評価をしてください」と指示し、評価をもとめた。その後、「いま聞いたのはどこのことばだと思うか」とたずね、「関東 関西 中部 その他 わからない」と選択肢をあたえてこたえてもらった。さ

らに、「関西などこたえたばあい、もし、その中でもここではないか、という予想があればこたえてください」と指示をし、こたえてもらった。見当がつかないというばあい回答は不要とした。おなじ音声・おなじ手順の実験を愛知淑徳大学（32名）、神奈川大学（33名）でも実施した。

(7)音声の評価語：1 聞き取りやすい－聞き取りにくい / 2 きれい－きたない / 3 きつくない－きつい / 4 おだやかな－あらっぽい / 5 丁寧－粗野 / 6 感情的－冷静 / 7 温かい－冷たい / 8 親しみやすい－親しみにくい / 9 知的な－知的でない / 10 明るい－暗い / 11 都会的な－田舎っぽい / 12 品がある－品がない

評定結果をリスナーグループごとにわけて図8にします。今回の臨地調査と愛知淑徳大の結果とがほぼおなじだったので、これを「東海グループ」としてひとつにまとめ、神奈川大学の参加者を「非東海グループ」とする。左の東海グループの結果は、過去の同様の調査とおなじく、知的評価について方言が共通語よりひくく、情的評価についてたかい、というものだった。具体的には「汚い・粗野・田舎っぽい・品がない」について岐阜バージョンが有意にわるい評定をあたえられた。

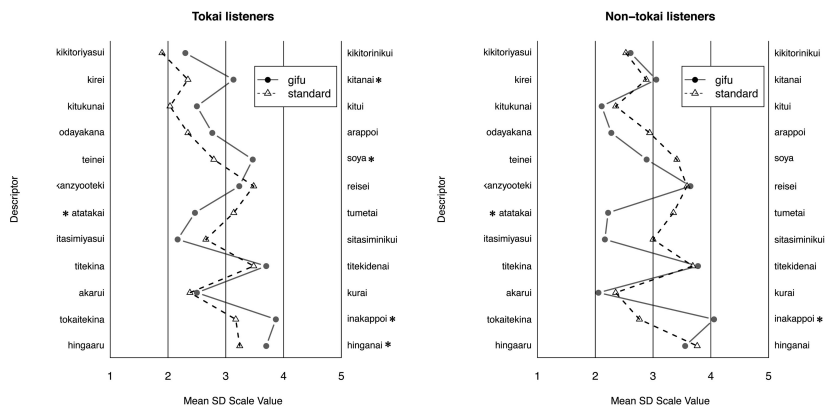


図8 岐阜弁・共通語音声の評価結果。左：東海地方のリスナー 右：東海地方外のリスナー。それぞれ、左側が肯定的な評価（ききとりやすい、きれい等）。評価語に付した「\*」は、岐阜弁・共通語の評定値に有意差があることをしめす（Welch の t 検定、5% 水準）。

いっぽう非東海グループは、情的評価については概略おなじ傾向をしめすが、知的評価については非東海グループより肯定的な評価を岐阜バージョンにあたえた。No.1-5の評定語については、岐阜バージョンが共通語に評価でなればか、追い越している。おなじ内容の名古屋方言・共通語バージョンを評価させた岡本（2001）では、愛知県内・県外のリスナーグループで結果に有意な差がみられなかった。これは岡本（2001:11）がのべるように、県外グループも愛知の大学に通学する学生で、名古屋方言へのなじみの差がちいさかったことが原因のひとつであろう。いっぽう本実験の非東海グループは、岐阜方言にたいするなじみはひくかったと推定され、「関西」「東北」などおおまかであいまいな方言推定がおおかった（詳細は大橋 2016）。上記の結果は、なじみのちいさい方言については、母方言話者（およびそれにちかい人たち）よりたかい知的評価をあたえることがありうることをしめす。今回の実験はわれわれにとってはじめてのこころみであり、評価させる音声の自然度や内容の適切さなど、改善すべき点がおおい。結果の詳細な分析と、方法や実験対象などの再検討が必要である。

## 6. 語彙項目

### 6.1 擬態語「パカパカ」（榊原・林）

信号の点滅を描写する擬態語に、愛知で「パカパカ」をつかうことが知られている（篠崎 2010）。今回の調査でもその使用をたずねたところ、表 2 の結果を得た。吉田・他（2015, 2016）とおなじく、地域×年代の表を作成したが、今回の調査地は地理的に直線状にならんでいるとはみなせない（図 1 参照）。以下では、便宜上、概略南から北に、三重・愛知・岐阜とならべる。また、50 歳以上の話者には 60 代の方もいたので、分けてしめす。パカパカは三重でもよく使われていること、いっぽう、岐阜の輪之内では愛知ほど使われていないことがうかがえる。



表2 信号の点滅をあらわす擬態語

○ パカパカ △ チカチカ ■ ポカポカ — 擬態語をつかわない

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	—		○				—
50		○		○	○	○△	
40	○△	—	○△		○	○	—
30	○	○	○	△	○	○	—
20	○	○	○	○	—	■	○△

## 6.2 「親さん」(榊原・林)

岐阜県東濃地域で、一般的には「親御さん、ご両親、御父母」などがつかわれるべき場面で、「親さん」という語がきかれる。岐阜方言だという指摘がある(神田2013)。「子どもの安全は親さんのほうでみてください」という例文で調査した結果(表3)をみると、もうすこし広域で使用されているようである。四日市の2地点ではほとんど「しらない」で、愛知に通学中のtomida20のみ「聞く」とこたえたが、それ以外の、三重のいなべ、愛知・岐阜の全地点で、全世代にわたってほぼ全員がつかうと回答した。岐阜西南端の海津から東濃までの分布が推測される。子育て世代以前の20代の話者にも浸透しているらしいこと、幼稚園や小学校の職員のほか、PTA役員など子の親も行事や会議など公的な場面でつかうことなどから、方言という意識がうすく、ひろく理解・使用されていることが推測される。

表3 「親さん」の使用 ○ つかう △ 聞く — つかわない

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	—		○				○
50		—		○	○	○	
40	—	—	○		○	○	○
30	—	—	○	○	○	○	△
20	—	△	○	○	○	○	○

## 6.3 「子供ら」の接尾辞(榊原・林)

子どもを集合的によぶ「子供たち」のなどにもちいる「たち」の意味の接尾辞は、岐阜などで撥音をともない「子供んた」(「た」が長呼されることあり)

が一般的である。岐阜に隣接する地域での状況をしるため調査にくわえたが、「子供たち」「子供ら」という共通語形しかいわない、という回答がおおかった。表4にはこれ以外の語形のみをしめす。最後がタの形式は岐阜に多い。いっぽう、撥音のあとがタではなくラの形式が三重側で得られ、愛西（八開・立田）でタとラの両方をもつンタラが得られた。ンラとンタの混交形の可能性が考えられるが、観察数もすくなく、地理的分布も未詳なので、隣接地域の様相などをしらべてさらに検討する必要がある。また、**tomida40** から高年層「コドモンダチ」というとの教示があった。共通語形もふくめたさまざまな語形の並存の可能性を示唆する。

表4 「子供たち」の接尾辞

● ンタラ    △ ンタ    ○ ンラ    — そのほか

( ) 内の記号は、その語形を「聞く」という回答をしめす（以下おなじ）

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	—		—				△
50		○		—	△	—	
40	—	—	△		●	△	△
30	—	(○)	○	●	—	△	△
20	—	—	—	—	—	(△)	△

#### 6.4 「仲間はずれを」をあらわす「はば」（榊原・林）

「仲間外れ」をあらわす俚言は、「気づきにくい方言」の一例としてたびたび調査されている（相村 2009）。今回の調査でも、全域でハバ系がえられ、永瀬（1994）の知見を再確認するにとどまった。表5に結果をまとめる。両語形併用のところは、よりよくつかうと回答されたほうを左に置いた。ただし、記号でしめたように、ハバチ、ハバチョやその促音挿入形など、接尾辞の変異形がみられた。公的な場面にあらわれにくいことばのため、変異形が発生・定着しやすいのだとかがえられる。促音挿入形（▲、◆）は立田・海津のみ。また20代に、ハバ系を使わない・知らないという回答がめだつ。岐阜・愛知のハバが共通語形におされて衰退傾向という相村（2009）の観察をうらづける。

表5 「仲間外れ」 ○ ハバ △ ハバチ ▲ ハバッチ  
◇ ハバチョ ◆ ハバッチョ — その他

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	○		○				○
50		○		△○	△○	○◆	
40	○	○	△		○	○◆	○
30	○	○△	○	○△	▲	○(◆)	○(△)
20	—	○	—	○◇	△	—	—

このほか、「どじょう」の古い俚言「どじよきち」(鏡味1978)を調査したが、全員が「知らない」という結果だった。おなじく「きのこ」をしめす「たけ」も調査したが、**inabe60**のみ「いう」と回答し、あとは全員「知らない」という結果だった。マツタケ、エノキダケなどの後部要素にみられ、「きのこ」の総称としても『日本言語地図』(5巻, 245図)で鳥根~三重さらに伊豆半島まで分布が報告されており、三重県長島方言について鏡味(1978)に報告があるが、「きのこ」に押され、ほとんど使われなくなっているものと思われる。

### 6.5. 関西方言の「しょうみ」(森口・吉田聖)

関西方言の「しょうみ」は、TVなどをとおして耳にすることがすくなくない。TV局の系列などから関西系の影響がちいさくない東海圏にも使用のひろがりがかんがえられるが、意味の理解が不十分になり、ややずれた意味でもちいられることがあると予想し、輪之内に隣接する岐阜県羽島市生育の吉田にとって可能な「まだ何にも準備できてないけど、しょうみなんとかなりそう」という例文をあげ、使用をたずねた。結果を表6にしめす。使うという回答は三重にかたよる。また、意味にかんする教示には「本当のところ」「正直な話」と、関西方言における意味にちかいとおもわれるものがおかった。**inabe50**が「実際のところ」とこたえており、調査文の意味にちかいように感じられるが、上述の意味の拡張がなされているかどうかは確認できなかった。

表6 「しょうみ」の使用 ● つかう — つかわない

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	—		—				—
50		●		—	—	—	
40	—	●	●		—	—	—
30	—	●	●	—	—	—	—
20	●	●	—	—	—	—	●

## 6.6 あそびことば「タンミ」(東)

鬼ごっこなどの遊びの最中、やすむ合図として「たんま」ということばをつかうかを調査した。すべての地域・年代でつかうという回答が得られたが、ほかにタンミという語形の回答があった(表7)。タンミは三重、なかでも四日市市の羽津・富田に集中する。四日市以外では **inabe30** だけで、大学時代に富田に隣接する川越町に住んでいたため、そこで聞いた可能性もあるが、学童期に使用・習得することがおおいあそびことばなので、いなべに存在する可能性もある。『日本方言大辞典』にもタンミの記載はなく、四日市の南の鈴鹿市方言を収録した江畑(1985)、白塚山(1995)にもない。分布領域にかんする情報は未詳だが、今回の結果はタンミが三重の中でも四日市周辺のかなりせまい地域だけに分布することを示唆する。また、**hazu40** からタンミ(アクセントはLLH型)は女の子がつかうという教示があった。今回のデータでも男:女=1:5で、おもに女兒にもちいられることばである可能性がかんがえられる。

表7 一時停止の要求のタンミ ● つかう — つかわない

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	—		—				—
50		—		—	—	—	
40	●	●	—		—	—	—
30	—	●	●	—	—	—	—
20	●	(●)	—	—	—	—	—

## 6.7. 愛知の気づきにくい方言語彙(田中・田邊)

語彙項目として、愛知の気づきにくい方言語彙をいくつか調査した。4年生山田が卒業論文(山田2016)のために調査した項目で、愛知の大学に通学する

ことによる愛知方言の受容を検討するため、愛知を中心に分布するとおもわれる、方言であることに気づきにくい語をとりあげた。今回の調査はそれらの地理的分布を確認し、研究の背景を提供する目的でおこなった。「名古屋駅」を指す「メイエキ」、「自動車学校」の「シャコー」、「(身体が) つらい」の意味の「エライ」、学校などの休み時間の「ホーカ」と、いずれも愛知方言としてよく知られている4項目について、使用度を5段階でたずねた。1または5をえらんだ話者が非常に多く、県ごとに明瞭な差がみられたので、各県・各年代の平均値をしめす(表8)。三重は羽津・富田・いなべの3地点の平均、愛知・岐阜はそれぞれ2地点の平均である。

表8 「メイエキ・シャコー・エライ・ホーカ」の使用度  
(県×年代の平均値：1=よく使う；5=まったく使わない)

	三50	三40	三30	三20	愛50	愛40	愛30	愛20	岐50	岐40	岐30	岐20
メイエキ	1.7	1.3	1.7	2	1.5	1	1	2.5	1.5	2.5	1	1
シャコー	1.3	1	2.3	2.7	4	1	1	1	2	1	1	1
エライ	1	1	1	1.7	1	1	1	2.5	1	1	1	1
ホーカ	4.3	5	5	4.3	2	1	1	1	5	5	5	5

「メイエキ」「シャコー」「エライ」に関しては、三県・どの年代も「よく使う=1」がおおい。メイエキは20・30代でよく使うという回答がおおかったが、**inabe20**、**tatuta20**が「4」としたため平均値がひくい(ほかは全員1)。**inabe20**は滋賀の大学、**tatuta20**は東京の大学に通っていたためである可能性が考えられる。

日高(2009)は、愛知・三重ではシャコー、岐阜では「自動車教習所」からキョーシューを使うとする。今回の調査では、岐阜でも **wanouchi60** 以外がシャコーを「よく使う=1」と回答し、「キョーシューをつかう」という教示もなかった。三重・愛知には生まれた岐阜西南端地域が岐阜一般とことなっているということかもしれない。また、愛知では50代だけ「3~5」と使用度がひくい。使用度に年代差があることがかんがえられる。

エライの「身体がつらい・疲れた」という意味での使用の記述はおおい。『日本言語地図解説1』(p.27)に、静岡・近畿・中国での使用、『日本方言大辞典』(p.333)に岐阜・愛知・三重での使用の記述がある。また『地方別方言語源辞典』

(p.116)でも、「静岡、長野以西に広く分布」とする。今回の調査では、**hazu20**、**tomida20**、**tatuta20** 以外は全員「1」で、今回の調査地全域で使われていることがわかる。先行研究の知見と一致する。

以上とことなり、ホーカは愛知での使用度はたかいが、三重・岐阜ではほとんど使用されていないという結果となった。『地方別方言語源辞典』(p.140)では「愛知県の学校でのみ使われる言葉」「一説には愛知県教育委員会認定の言葉」と記載する。山田(2007:26)でも岐阜・愛知の学生を対象とした調査の結果、「放課」は愛知県の言葉として、使用域が県域と一致する」とあり、今回の調査も同様の状況をしめす。山田(2016)の調査でも、愛知に通学中の他県の学生はほとんど使用しない。使用場面・年代がかざられているため、接触による受容がおこりにくいのだとおもわれる。

## 7. 文法項目

### 7.1 否定形過去「イカンカッタ・イカンクナッタ」(加藤・久野)

調査地である愛知西部～三重北部の動詞「行く」の否定形過去は、『方言文法全国地図』(以下、GAJ)4集、151図によれば、伝統的にはイカンダ(四日市など)かイカナンダ(その他)だが、現在はむしろイカンカッタという形式がよく聞かれる。東海地域で優勢な否定辞ンによるイカンに共通語の(形容詞の)過去形の接尾要素カッタが接する明示的な構造のため受容されやすいとおもわれる。GAJの段階(1891-1931年生まれの話者、1979-1982年調査)では、イカンカッタは東海地域については知多や東郷など名古屋の西隣や、三重県志摩にみられるのみだが、以降の世代で勢力を増したものとおもわれる。同様の構造をもつイカンクナルも山梨以西の大部分での使用が指摘されており(井上・鐘水2002:15)、その過去形イカンクナッタも広域の使用が予測される。今回の調査では「用事があったから練習にはイカンカッタ」と、「もうあそこにはイカンクナッタ」の使用度をたずねた。6.7節とおなじく県×年代の平均値で結果をしめす(表9)。

イカンカッタ・イカンクナッタは、地域に大きな偏りなく全体的によく使わ

れるが、イカンカッタの方がイカンクナッタより使用度がたかい傾向がある。また愛知 50 の平均 5 をはじめとして、上の年代でとくにイカンクナッタの使用度がひくい傾向がある。三重 60、岐阜 60 もイカンクナッタを全員 3 と回答するなど、あたらしい否定形過去をあまり使用しないようである。ただし、使用度がひくい愛知 50 と三重 60、岐阜 60 は全員男性だった。表 9 の形式ではしめせないが、イカンクナッタの使用度は調査地全体の平均で男性 2.3、女性 1.3 であり、世代差が性差によるみかけのものである可能性もある。しかし、イカンカッタがイカンナダにたいする新形式であることをかんがえると、年齢差が真の傾向であり、上記の性差は、話者の年齢と性とはが交絡したことによるみかけのものである可能性がたかい。追調査による確認が必要である。このほか、終助詞「が」の使用度もしらべたが、愛知でよく使われ（5 段階で平均 2.3）、岐阜は使用度が低く（平均 4.2）、三重ではほとんど使われない（平均 4.9）、という結果だった。表による報告は省略する。

表 9 否定形過去の使用度：イカンカッタ / イカンクナッタ  
 (県 × 年代の平均値：1 = よく使う；5 = まったく使わない)

年代	三重	愛知	岐阜
60	1.5 / 3		2/3
50	2/2	2/5	1/1
40	1/2	1/1	1/2
30	1/1	1/1	1/1
20	1.3 / 2	2/2	1/1

## 7.2 否定形「やん」の分布（尾迫・古池・光島）

過去 2 年につづき、一段系活用動詞のヤンによる否定形に焦点をあてた調査をおこなった。調査したのは、表 10 の 9 項目。調査文は省略するが、2 は「(料理が) できない」、6 は「(漢字が) 読めない」で能力 (不) 可能、いっぽう 5 は「(明日) あそべない」、8 は「(昨日) 寝られなかった」で状況 (不) 可能、7 「(この服) 着られる」はどちらとも解釈できる (状況可能が優勢か) 文脈だった。

吉田・他（2015, 2016）で概観したとおり、ヤンによる否定形は、三重・奈良・和歌山など近畿周縁部の伝統的変異形だったものが若い世代を中心にあらたな採用をふやし、中央部にも進出しつつあることが複数の研究者に指摘されている（太田 2013, 日高 2014, 村中 2014, 鳥谷 2015）。これらの先行研究では検討された語がすくないため、ヤンの否定形がカ変・サ変をふくむ一段系動詞全体にどのていど使用を拡大させているかという点は不明だった。この点を中心に検討した吉田・他（2015）および清水（2015）によれば、三重ではヤンの否定形は変格活用のシヤン、コヤンや、飽ヤン、任セヤンなど長い語でも可能であり、いわゆる語彙拡散の様相をしめしつつ体系的な変化へとむかう状況をしめしていることがうかがえる。しかし、伝統的な否定形の「～ん」、「～へん」、「～せん」をしりぞける勢いをしめしているかは明らかではなかった。そこで今回の調査では、凡例の4形式を提示して使用をたずね、さらにいずれをもっともよくつかうかの順序もこたえてもらった。表10では、複数回答については左からよくつかうとこたえた順にならべてある。

表10 動詞否定形

○ ヤン    ■ ン    ☆ ヘン    △ セン    — その他

(1 見ない)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	○		○				☆
50		○☆		■	☆	■	
40	○	☆○	☆		○	☆	☆■△
30	○	○	○	■	☆	■	○
20	☆	○	○	○	■	■	—

(2 できない)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	○		■○				☆
50		☆		■	☆	■☆	
40	○☆	☆	☆		○	☆	☆■△
30	○	○☆	○☆	■	☆	■	○
20	☆	○■	☆	■	■	■	■



## (3 食べなかった)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	△		—				■
50		■☆		■☆	■	■	
40	△	△	☆		—	■☆	■☆
30	○	○■☆△	■○☆	■	☆	■○	○△
20	☆■	○	■○	■	■	■	■

## (4 しなかった)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	—		—				☆
50		△		■☆	■	■	
40	△	△	☆		—	☆■	■☆
30	○	○■☆△	○	■	■	○■	△
20	■	○	△	■	—	■	—

## (5 遊べない)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	☆		○■				■☆
50		○		■	☆	■	
40	○	☆	■		○	☆	☆■
30	○	○■☆	○■	■	○	■○☆	○
20	■	○■	☆	■	■	■	■

## (6 読めない)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	○		○■				☆
50		☆		☆■	☆	■	
40	○☆	☆	■		○	☆	■☆△
30	○	○■☆△	○☆	■	○	■○	○
20	☆	○■	○☆	■	■	■	■

## (7 着られない)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	○		○				△
50		☆		☆■	☆	■	
40	○☆	☆	■		○■	☆	■☆△
30	■☆	○☆△	○☆	■	■	■	○☆
20	☆	○	○	■	■	■	■

## (8 寝られなかった)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	△		—				☆■
50		■		☆■	☆	■	
40	○	△	☆		—	☆	■☆
30	○☆	○■☆△	■	■	■	■	△
20	■	○■	△	■	■	■	■

## (9 来ない)

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	☆		■				—
50		☆		☆	☆	■	
40	☆	☆	☆		☆○	☆	■☆△
30	○	○☆	○☆	■	☆	■○	○
20	☆	○	○	☆	☆	■	△

三重でヤン、愛知・岐阜でンという傾向だが（ヘンは調査地全域）、三重に隣接する岐阜の海津や、その海津に隣接する岐阜の輪之内、愛知の八開・立田でもヤンの否定形を採用する個人がいる。また、ほとんどの語でヤンの否定形をつかうとするのは20, 30代の若い世代がおおく、勢力拡大があたりらしい現象であることを示唆する。昨年度調査した禁止の「しないで」や「来ないじゃないか」ではヤンをふくむ形式は三重県最北端の木曾岬町までしかみられなかったが、このとき調査した弥富・蟹江より北の今回の調査地でおおくの語につかうとする個人（**kaizu30**, **wanouti30**, **tatuta40**）がいた。鳥谷（2015:164）で「コヤン」のTwitterの発信地分布にもとづき、愛知・岐阜におけるヤンの否定形の使用が示唆された。鳥谷が指摘するとおり、愛知に通勤・通学する三重県民は少なくなく、その人たちによるツイートがデータに混入していることが予想されるが、おそらくは三重方言（話者）との接触により、自身の採用にまでいたった個人もあらわれていることがうかがえる。本稿の調査地より南の四日市・鈴鹿・津・松坂を中心に調査した赤塚（2016）では、高年層をのぞくとほとんどの調査語でヤンの否定形が優勢だった。近畿におけるヤンの否定の拡大が三重（など）で先行したことが確認されたとかんがえてよいとおもわれる。

語によるちがいをみると、ヤンの否定形がもっともおおい「見ヤン」が27

人中13人なののにたいして、「遊ベヤン」11人、「読メヤン」12人と、(不)可能形での使用度もたかい。逆に「食ベヤンカット」7人、「シヤンカット」5人、「寝レヤンカット」4人と、否定形過去への拡大はおそいもようである（「食ベヤンカット」「シヤンカット（センヤンカット）」「寝レヤンカット」がおおくなる）。ヤンの否定形過去がかなりながくなることが、ヤンをふくむ形式がさけられる（採用がおくれる）一要因とかがえうる。いっぽう、全体で3拍とみじかいカ変の「来ヤン」も9人とそれほどおおくなく、「コーヘン」が目立つ。変格活用への拡大は、一段活用より若干おこなっているのかもしれない。

### 7.3. やさしい命令の終助詞「りん」「りい」の使用（木村・後藤・杉浦）

GAJ 2-85~91 図によると、三重の動詞命令形は「起きよ」「見よ」「せえ」など、いわゆる西日本方言一般の形式だが、よりやさしくうながすような命令形の終助詞に「りい」「りん」がみられる。たとえば鈴鹿市方言について、白塚山(1995:61)は「りん」の意味機能を「催促」と記述し、「もうそろそろ起きりん」という例をしめす。今回、「早く起きなさい / 食べなさい / しなさい」の3項目を調査したところ、リー、リンはほとんど得られず、三重ではほぼ全員がイキナ、イキーだった。ただし、さらに南の鈴鹿、津、亀山、松坂などを調査した赤塚(2016)ではリン、リーが津・鈴鹿の高年層を中心にみられており、他地域の話者との接触による受容による可能性はひくそうである。愛知・岐阜ではヤー（食べヤーなど）が圧倒的だが、**hatikai30**と岐阜の**kaizu50**のみ、リンをつかうとこたえた。ともに大学が豊橋であり、その時期に三河方言の「りん」（江端 1981:21）を獲得した可能性がたかい。「りん」は「じゃん・だら・りん」というフレーズで知られ、観光キャンペーンのキャッチフレーズ（「いっぺん、こりん」岡崎市）にもつかわれる、象徴的な三河新方言のひとつだが、今回の結果により、三重と三河の「りん」に地理分布上の断絶があることが確認された。この結果は三重と三河の「りん」の関連を支持するものではないが、両者は語形だけでなく、「やさしい命令」という機能も一致する。今後さらに検討したい。

#### 7.4. 方言敬語助動詞「ゴザル・ミエル」(辻・所)

東海地域の敬語補助動詞は「隣の家のBさんは草取りしてゴザル」のような「ござる」が伝統的には主流だが、江端（1998）などに指摘があるように、「草取りしてミエル」という尊敬補助動詞が使用を拡大している。本調査でも（8）の6場面を設定し、「～ている」にあたる補助動詞の形式をたずねた。調査もa～fの順で実施した。テミエルの回答数のみにしぼり、結果を表11にしめす。おもに社会の活躍層が習得・使用する敬語の性質にかんがみ、またスペースの都合で、すべての調査地をまとめ、世代別に集計した。羽津でミエルがすくない以外、明瞭な地域差はみられなかった。詳細は大西（2016）を参照されたい。

##### (8) 敬語補助動詞調査文（〔 〕内は場面）

- a. [近所] こんな暑い日にBさんは草取りして（ ）わ。
- b. [裁判] この被害者の方はいまもお一人で暮らして（ ）んですね。
- c. [近所] あの事件を知って（ ）ますか。
- d. [近所] 隣の〇〇さんは町内会長をやって（ ）ますよ。
- e. [職場] 今、部長は外出して（ ）ます。
- f. [会議] △△さんは、それについてこのようにこたえて（ ）ますよ。

表11 敬語補助動詞テミエルの使用：ヨコ a～f＝調査文。

タテ＝話者の年齢（50・60歳代を合併）。数字はテミエルの回答数。

	a	b	c	d	e	f	人数
50～	0	2	0	0	1	4	7
40	2	2	1	1	2	5	7
30	2	3	2	5	2	4	6
20	1	1	0	2	1	1	7
計	5	8	3	8	6	14	

調査文や手順の不備のため、継続・結果相をあらわす補助動詞をおぎなうというこちらの要求が、とくに前半で理解されにくかった。調査文aでは「…草取りしてえらいわ」など補助動詞ではない要素の回答がえられることがあったし、質問の意図がつかず、回答をえるのを断念したケースもあった。したがって、表11の数値はだいたいの傾向をしめすにすぎない。しかし、調査文b, d, f、とくにfでテミエルがおおいという傾向は実態をあるていど反映しているとお

もわれる。調査文cでは「知っとる？」など尊敬をあらわす形式がないものもおおく、また調査文eも、組織内部での上司にかんする報告で敬語の使用が適切な場面という設定だが、おそらく外部にたいする発言と理解された結果、「…外出しております」という回答がおおかった。これにくわえて、近所の知人にたいする発言である調査文a, cでテミエルの使用がすくないこと、逆に調査文b, fの裁判・会議や、調査文dの町内会長についてはなすという、公的性格がよい場面でテミエルの使用がおおいことは、テミエルがあるていどあらたまつた尊敬の形式であることを示唆する。

「いる」「くる」の本動詞の尊敬語としての「みえる」の用法の拡張に由来するとおもわれるこの形式は、おそらく、共通語と語形がおなじで、かつ（共通語でも）尊敬用法であるという理由のため、方言であると意識されにくい。このため東海地域では、文書や会議中の発言など、高度に公的な場面でももちいられることがすくなくない。名古屋市議会会議録を対象として敬語形式と使用者との関連を検討した大西（2016）でも、方言敬語「ござる」との使用パターンのちがいがあきらかになっている。

世代別の傾向をみると、社会活躍層で、かつ気をつかった発言が要求される30, 40代のテミエルの使用がめだつ。20代もtomida20をのぞくと社会人であり、敬語の習得が不完全ともおもわれない。この世代には「いらっしやる」など共通語の敬語形式の回答もすくなくなかった。この世代には「テミエルは共通語ではない」という意識をもつ話者がふえているのかもしれない。

## 7.5. 「やんか」「んやんか」の機能の使い分け（東・伊藤萌・下瀬）

吉田・他（2016）でこの二種の形式の機能の使い分けをしらべ、三重県木曾岬町までは機能の区別の理解がみられ、隣接する愛知県弥富市では、形式としてはしているものの用法の区別は理解されていない、というみとおしを報告した。ただし、そこで質問文デザインにもりこんだ「「んやんか」以降のできごとが想定内かどうか」と「んやんか」「んやけど」のつかいわけについては、その存在を示唆する結果がえられなかった。そこで今回は、質問文を（9）の二種類にしぼり、「やんか」「んやんか」の使用とつかいわけをしらべた。詳し

くは吉田・他(2016)を参照されたい。

(9) 「やんか」「んやんか」調査文

(a) 伊勢に一緒に行った友人に対して

「先月、伊勢に行ったでしょう? そのとき、赤福氷を食べたよね」(確認)

(b) 旅行の話をして別の友人に話すときに

「先月、伊勢に行ったんだよ、そうしたらあいにく雨でね…」(報告)

三重では(a)に「行ったやんか」(b)に「行ったんやんか」というつかいわけが予想される。これに愛知で(a)に予想される「行ったじゃんか」をくわえた3つの候補をしめし、それぞれについて使用度をたずねた。ここでは「やんか」「んやんか」にしぼって結果を整理する(表12)。各セル、列が調査文(a),(b)を、行が接続形式「やんか」「んやんか」をしめす。対角線上に「○つかう」、そのほかに「×つかわない」がくれば、つかいわけがあることになる。この基準に適合するケースを濃いグレーでしめたが、予想どおり、三重にのみみられる。対角線上以外に△がある **tomida50, tomida30, inabe20, kaizu30** (薄いグレー)をこれに準ずるものとみても、やはりつかいわけは三重にかたよる。

表12 「やんか」「んやんか」の使い分け: 左=確認・右=伝達 / 上=「やんか」  
・下=「んやんか」 ○=使う △=聞く ×=使わない

年代	羽津	富田	いなべ	立田	八開	海津	輪之内
60	○× ××		○× ○○				○△ △△
50		○× △○	○× ×○	×× ××	×× ××	○× ××	
40	○× ×○	○× ×○		×× ×○		○△ ××	○× ××
30	○× ×○	○× △○	○× ××	×× △△	△△ △△	○△ △○	○× ××
20	○× ×○	○○ ○○	○× △○	△× △×	△× ××	○× ××	△× ××

いっぽう愛知県の立田・八開は×がおおく、「やんか」「んやんか」の認知・使用がひくいとみられる。また、岐阜では(a)に「やんか」をつかうが、(b)

には「んやんか」をつかわないという回答がおおい (**kaizu40, kaizu20, wanouti40, wanouti30, wanouti20** もこれに準ずるか)。(b) では、「行ったんやけど(さ)」だという回答がおおかった。昨年の調査結果と総合すると、三重の機能つかいわけは、三重と愛知をむすぶ鉄道のある弥富・蟹江では「やんか」「んやんか」とも知っているが、機能のつかいわけは未習得、その北の立田・八開には「やんか」「んやんか」のいずれもとどいていない、また、長島・木曾岬など三重最東端の市町とちかい岐阜の海津、輪之内では「やんか」だけとりいれている、と整理できる。交通網や人口の移動などとの関連も考慮して、さらに調査すべきだとおもわれる。この用法の区別は井上・鎌水(2002:227)に、関西で未知の文脈、既知の文脈でつかいわけるが、東京ではこのつかいわけがつうじないとある。前稿・本稿の結果は、そのつかいわけの最前線のひとつが三重最東端であり、その近隣の地域にも部分的に受容されつつあることを示唆する。なお **inabe30** より、「行ったんやんか」はそのあとに「だけど…」と逆接的な内容がつかえないとつかえない、という教示があった。上記の、昨年度調査でとらえられなかった言語直感の存在をしめす情報だとおもわれる。三重県津市生育の4年生赤塚の直感とも一致しており、調査文デザインを再検討してさらにしらべたい。

#### 7.6. 接触による混交形式「来ないじゃないか」(田中・田邊)

吉田・他(2016)で、長島を中心とした三重・愛知の県境地域について、三重のヤンの否定と、愛知の文末詞ガーとを折衷した、コヤンガーという混交形の存在を報告した。この点について、中西(2016)がさらに検討しているが、本稿の話者にもその一部の調査を実施した。友人が時間になっても来ず、いっしょに待つ友人に怒りながら「来ないじゃないか!」という場面のいかたとしてコヤンガー、コヤンヤン、コーヘンガー、コーヘンヤンをしめし、使用度をたずねた。結果は表13のとおり。

表 13 「来ないじゃないか」

○ コヤンヤン ● コヤンガー ▼ コーヘンガー ▽ コーヘンヤン

年代	羽津	富田	いなべ	八開	立田	海津	輪之内
60	▽		聞くのみ				▼▽
50		●○▼▽	—	▼	▼	▽	
40	○▼▽	○▽	○▽		▼▽	▼▽	▼▽
30	○▽	○▼▽	○▽	●○▼▽	●▼	○▽	▽
20	○▽	○	○	聞くのみ	—	▼▽	▽

前回の結果と基本的におなじく、否定形は三重にヤンがかたより、ヘンの否定形は調査地域全般にみられる。「じゃないか」にあたる文末詞はヤンが調査地域全般、ガーはやや愛知にかたよる。混交形コヤンガーは **hatikai30**, **tatuta30** のみから使うという回答があった。中西 (2016) の旧長島町を中心とした調査では、長島の若年層を中心としてコヤンガーの使用もおおく、接触による混交形の分布が、地域的にかぎられた現象であることをしめす。くわしくは中西 (2016) を参照されたい。

## 8. まとめと課題

2014年夏に開始した調査が3回目となり、あるていどまとまった調査データを蓄積し、三重・岐阜・愛知の県境地域の言語実態について多少かんがえをふかめることができた。これまでご支援くださったみなさんに感謝もうしあげる。あきらかになってきたことのひとつが、吉田・他 (2015, 2016) でものべた、いわゆる「東海三県」における言語圏としての三重の独立性である。今回もタンミ (6.6 節)、ショーミ (6.5 節)、子供ンラ (6.3 節)、ヤンカ/ンヤンカの区別 (7.5 節)、やさしい命令のリー (7.3 節)、京阪式アクセント (4.2 節) など、三重を愛知・岐阜から分離するさまざまな言語現象を確認した。逆に、愛知・岐阜を三重から分離する、ハバの促音挿入形 (6.4 節)、親さん (6.2 節)、複合語アクセントにみられる前部・後部要素の独立性の高さ (4.1 節) などあらたに見出した。また言語意識の上でも、三重の「独自性のあるじぶんたちのことばへの好意」のたかさ (3 節)、という特徴も確認した。いっぽう、否定形ヤン



や文末詞ガーのように、双方向で流入している形式もあり（7.1, 7.6 節）、音声聴きとり実験では、東海地域話者にとっての「なじみのあることばづかい」の知覚に関東とのちがいがあることも示唆された（5 節）。また今回ははじめて、4 年生の卒論との連携をつよめ、卒論の項目や成果との関わりを調査や結果の解釈にとりこむことができた。卒論の公開をすすめ、両者の成果を相互参照していただけるよう、準備中である。2 拍名詞アクセントの対立解消については、一定の成果があげられたとかがえ、いったん今回で調査を終了し、今後は長い語の文レベルでのふるまいや、複合語、境界地域の特殊アクセントなどに焦点をうつす予定である。ご教示いただきながら本稿で報告できなかった項目もある。さらに調査と成果の公表を継続し、ご協力くださったみなさんへの御礼にかえたい。

**謝辞** 話者の紹介、日程調整、調査会場の調整などについて、地方自治体の諸機関（教育委員会・生涯学習課・市民センターなど）にお世話いただきました。篤く御礼もうしあげます。また、4.1 節、5 節の内容について、「名古屋音声研究会」でおおくの重要な意見をいただき、いくつかの誤りを修正することもできました。この研究は、愛知淑徳大学の「学外教育等活動」予算および、文部科学省科学研究費助成金（「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」研究代表者：窪菌晴夫、課題番号 26244022）による助成を受けています。

## 参考文献

- 赤塚奈津美 (2016) 「三重愛知岐阜における「ヤン」「ヘン」「ン」の使用度と、やさしい命令「リン」「リィ」の使用域」愛知淑徳大学卒業論文
- 秋永一枝 (2014 編) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版』東京：三省堂
- 生田早苗 (1951) 「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」寺川喜四男・他『国語アクセント論叢』東京：法政大学出版局 (pp.255-346)
- 井上史雄・鎌水兼貴 (2002) 『辞典<新しい日本語>』東京：東洋書林
- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42(1), 15-70.
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」杉藤美代子 (編) 『講座日本語と日本語教育 2』東京：明治書院 (pp.178-205)
- NHK 放送文化研究所 (2016 編) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』東京：NHK 出版
- 江畑哲夫 (1985) 『鈴鹿市のことば-三重県鈴鹿市の方言-』私家版
- 江端義夫 (1981) 「方言敬語法体系の方言地理学的考察-愛知県地方方言のばあい-」『国文学攷』(広島大学) 92, 19-32.
- 江端義夫 (1998) 「新しい敬語の補助動詞「~テミエル」が保守的な共通語と抗争する方言戦略」『国語教育研究』(広島大学) 41, 1-14.
- 太田有多子 (2013) 「紀伊半島沿岸部における打消表現」岸江信介・他『都市と周縁のことば-紀伊半島沿岸グロットグラム』大阪：和泉書院 (pp.63-90)
- 大西恵梨 (2016) 「東海地方の方言敬語「テミエル」について-臨地調査と市議会議事録から-」愛知淑徳大学卒業論文
- 大橋里帆 (2016) 「ことばが与える印象の比較-岐阜方言と共通語を用いて-」愛知淑徳大学卒業論文
- 岡本真一郎 (2001) 「名古屋方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響」『社会言語科学』3(2), 4-16.
- 鏡味明克 (1978) 「長島の方言」伊藤重信 (編) 『長島町誌 下巻』3章1節
- 神田卓郎 (2013) 「おまはん、ぜえあーしょはどこやったな? 岐阜よもやま話 No.01」『篝火 岐阜北法人会 Web 会報』No.132
- 金田一春彦 (1973) 「愛・三・岐阜県境付近の方言境界線について」『国語国文学論集松村博司教授定年退官記念』(『金田一春彦著作集』第8巻に再録)
- 窪菌晴夫 (1995) 『語構成と音韻構造』東京：くろしお出版
- 郡史郎 (2004) 「東京アクセントの特徴再考-語頭の上昇の扱いについて-」『国語学』55(2), 16-31.

- 郡史郎 (2011) 「大阪市方言若年層の二拍名詞 4 類・5 類のアクセントについての一考察」 杉藤美代子 (編) 『音声文法』 東京：くろしお出版 (pp. 229-250)
- 国立国語研究所 (1966) 『日本語地図解説 - 各図の解説 1 -』 大蔵省印刷局
- 真田信治・友定賢治 (2007 編) 『地方別方言語源辞典』 東京：東京堂出版
- 篠崎晃一 (2010) 「信号が“パカパカ”する？」 小学館 Web 日本語コラム 「共通語な方言」
- 清水美希 (2015) 「打消表現“ヤン”の使用範囲と意識」 愛知淑徳大学文学部卒業論文
- 白塚山隆彦 (1995) 「鈴鹿弁しゃべれやんだら、やっていけへんわさ！ (鈴鹿方言集)」 鈴鹿市職員労働組合 (編) 『あゆみ』 (pp.47-61)
- 相村知美 (2009) 「「仲間外れ」をあらわす方言の現状と伝播の様態」 *Journal of East Asian Studies* 7, 61-80.
- 鳥谷義史 (2015) 「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐる」 『国立国語研究所論集』 9, 159-176.
- 田中ゆかり・前田忠彦 (2012) 「話者分類に基づく地域類型化の試み」 『国立国語研究所論集』 3, 117-142.
- 中井幸比古 (2002) 『京阪系アクセント辞典』 東京：勉誠出版
- 中井幸比古 (2012) 「複合語アクセント(1)」 松森晶子・他 『日本語アクセント入門』 (10 章) 東京：三省堂
- 永瀬治郎 (1994) 「キャンパス言葉全国分布図 仲間はずれ」 『月刊言語』 32 (6), p.114.
- 中西恭介 (2016) 「県境にみられる方言 - 三重県桑名市旧長島町を中心に -」 愛知淑徳大学卒業論文
- 日高水穂 (2009) 「「自動車学校」か「自動車教習所」か - 近代施設の名称と略称の地域差 (方言の新語)」 『日本語学』 28 (14), 144-155.
- 日高水穂 (2014) 「近畿地方の方言形成のダイナミズム 寄せては返す「波」の伝播」 小林隆 (編) 『柳田方言学の現代的意義 - あいさつ表現と方言形成論』 ひつじ書房 (pp.245-264)
- 町一誠・樋口匡貴・深田博己 (2006) 「話し手の方言使用と印象：コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響」 『社会心理学研究』 21 (3), 173-186.
- 水谷修 (1960) 「名古屋アクセントの一特質 (上)」 『音声学会会報』 102, 8-10.
- 村中淑子 (2014) 「大阪・奈良の方言における否定辞について - 世代差を中心に -」 『人間文化研究』 (桃山学院大学) 1, 3-27.
- 山田晃平 (2016) 「大学進学に伴う方言の受容 - 愛知県西部への進学者と近隣地域

の場合」愛知淑徳大学卒業論文

- 山田敏弘 (2007) 「岐阜・愛知の若年層方言について 1 遊びのことば・学校のことば・オノマトペー」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』56(1), 1 - 41.
- 吉田健二・他 (2015) 「三重県北・中部方言の現状：予備調査報告」『愛知淑徳大学国語国文』38, 124 - 150.
- 吉田健二・他 (2016) 「三重・愛知県境地域における方言の接触と変容」『愛知淑徳大学国語国文』39, 218 - 250.
- Clopper, Cynthia & David Pisoni. (2007). Free classification of regional dialects of American English. *Journal of Phonetics* 35(3), 421 - 438.
- Giles, Howard & Andrew Billings. (2004). Assessing language attitudes : speaker evaluation studies. In Davies, A. & C. Elder (eds.). *The Handbook of Applied Linguistics*. Malden, MA, USA : Blackwell Publishing.
- Labov, William. (1963). The social motivation of a sound change. *Word* 19(3), 273 - 309.
- Pierrehumbert, Janet & Beckman, Mary. (1988). *Japanese Tone Structure*. Cambridge, MA : MIT Press.

(吉田健二：本学非常勤講師、東栞奈・伊藤菜緒・伊藤萌香・尾迫愛理・加藤千尋・木村后花・久野由実・古池舞帆・後藤温賀・榎原希美香・柴田晴菜・下瀬桃子・杉浦玄佳・田中優奈・田邊梨紗子・辻咲希・所恋実・橋本晋太郎・林実咲・光島千尋・森口綾奈・吉田聖菜：国文学科3年生)